

資料

## 施設ケア提供者の伝統行事への認識と高齢者ケアの実践 ー沖縄県宮古島の一介護老人福祉施設の事例ー

呉地祥友里<sup>1)</sup> 大湾明美<sup>1)</sup> 佐久川政吉<sup>1)</sup> 下地敏洋<sup>2)</sup> 田場由紀<sup>1)</sup>

### 要 約

【研究目的】 目的は、沖縄県宮古島の介護老人福祉施設において、施設ケア提供者の伝統行事への認識と伝統行事に関する高齢者ケアの実践を把握することである。

【研究方法】 対象は、沖縄県宮古島のA介護老人福祉施設の施設ケア提供者（以下、「ケア提供者」とする）14名であった。方法は、半構造化した面接調査を行い、その内容は①ケア提供者の伝統行事参加の状況、②ケア提供者の伝統行事への認識、③ケア提供者の伝統行事に関するケアの実践であった。データ分析は、面接調査内容から、語りの原文をセンテンス化し、類似した内容をまとめ、検討した。

【結果と考察】 1. ケア提供者は全員が、伝統行事に参加しており、高齢者の生活してきた地域の伝統行事を把握しやすいと考えられた。2. ケア提供者の伝統行事への認識は、＜高齢者は先祖を崇拝している＞、＜家族との交流＞になり＜宮古島の大事な行事＞とし、伝統行事は＜一時帰省の機会＞となり＜楽しかったことの支援＞として、QOL向上のための高齢者ケアにつなげたいと認識していると考えられた。3. ケア提供者の伝統行事に関するケアの実践は、言語によるニーズ、非言語によるニーズがあり、そのニーズの充足状況は、＜ニーズの充足＞、＜代替ケア＞、＜ケアの発展＞であった。ケア提供者の自己評価は、＜高齢者のニーズ重視のケア＞、＜必要なケア＞、＜習慣の継続＞、＜当たり前のケア＞であった。施設入所高齢者への伝統行事の現実的なケアのあり方は、地域の生活者の一人として伝統行事について学び、参加することが、施設ケアに伝統行事を取り入れる第一歩であると推察された。

キーワード：施設ケア提供者 伝統行事 高齢者ケア 沖縄県宮古島

### I. はじめに

高齢者ケアは、生活の継続性を維持するためのケアが求められ<sup>1)</sup>、その生活を捉える際には、地域性からの視点も必要とされている<sup>2)</sup>。

沖縄県の地域性として、伝統行事や祖先崇拝の信仰等があり、在宅高齢者は伝統行事に参加することや、伝統行事で役割を担うことが自尊心を高める<sup>3)</sup>、と報告されている。また、沖縄県の離島である宮古島の在宅高齢者については、伝統行事への参加が幸福感に影響していることが示唆されている<sup>4)</sup>。

地域で暮らす在宅高齢者だけでなく、要介護状態の施設入所高齢者においても、生まれ島に一時帰省する「ふるさと訪問」は「伝統行事」の時期の帰郷を最も多く希望<sup>5)</sup>しており、伝統行事への参加ニーズが推察された。しかし、伝統行事に参加する為には、「本人の健康上の問題」、「家族の受け入れ体制」、「施設、役場、ボランティア等の介護体制」<sup>6)</sup>の課題があった。

このように、施設入所高齢者は「伝統行事」への参加ニーズがあるが、課題への対応は容易ではなく、施設内での代替の高齢者ケアの検討も必要と考える。特に、伝統行事が色濃く残り、高齢化率が高く、施設入所率が高い離島においては、現実的な解決が急がれている。そのため、施設ケア提供者の伝統行事への認識の実態

把握及び伝統行事に関する高齢者のケアの現状把握が必要である。

そこで本研究の目的は、沖縄県宮古島の介護老人福祉施設において、施設ケア提供者の伝統行事への認識と伝統行事に関する高齢者ケアの実践を把握することとした。

### II. 研究方法

#### 1. 対象

対象は、沖縄県宮古島のA介護老人福祉施設の施設ケア提供者（以下、「ケア提供者」とする）14名である。対象地域の宮古島は、沖縄本島から南西へ290Kmの平坦な島で総人口は55,911人、高齢化率約21%（2006年11月30日現在）である。特徴ある伝統行事は、先祖供養として旧盆（以下「お盆」とする）や旧十六日祭（以下「十六日」とする）、健康や安全祈願としてサニツ（浜下り）、五穀豊穡や雨乞いとしてクイチャー等があり、現在でも伝統行事は高齢者を中心に行なわれている。

ケア提供者の選定は、ケア提供者29人中、管理者またはケア責任者から調査期間中に勤務しているケア提供者の紹介を受け調査協力の同意が得られた者とした。

#### 2. 方法

データ収集は、半構造化した面接調査を行った。面接は、A介護老人福祉施設のケアの場で平成19年2月17日～28日に、個別に30分～60分行った。面接内容は①ケア

1) 沖縄県立看護大学

2) 琉球大学教育学部

提供者の伝統行事参加の状況（過去、現在）、②ケア提供者の伝統行事への認識（高齢者が大事にしていると思われる伝統行事、今後高齢者ケアに必要であると思う伝統行事）、③ケア提供者の伝統行事に関する高齢者ケアの実践（高齢者の伝統行事に関するニーズの内容、高齢者の伝統行事に関するニーズの充足状況、高齢者ケアの自己評価）であった。面接内容は、ケア提供者の同意を得て録音し、逐語録を起こし、面接記録とあわせて個票を作成した。

データ分析は、面接調査内容から、語りの原文をセンテンス化し、類似した内容をまとめた。記入は、原文のセンテンス化を「」、類似した内容のまとめを＜＞で示した。

### 3. 用語の定義

「伝統行事」とは、伝統的に継承し定期的に営む行事で、神事を通した宗教的な意味合いの強い行事とした。また「伝統行事参加」とは、伝統行事の開催場での直接的な参加だけでなく、居場所からの「拌み」等の間接的な参加も含むとした。

### 4. 倫理的配慮

対象施設の管理者へ事前に研究目的を文書及び口頭で説明し承諾を得た。ケア提供者にはケア評価でないこと、自由意思での協力、プライバシーの保護、研究目的に限定した使用など倫理的配慮事項を十分に説明し同意を得た。沖縄県立看護大学の倫理審査委員会の承認を得た研究計画に基づいて実施した。

## III. 結果

### 1. ケア提供者の伝統行事参加の状況

ケア提供者14人の概要は男性5人、女性9人、年齢は20代～50代、職種は介護職10人、看護職2人、栄養士1人、事務管理者1人で全員が宮古島の出身者であった（表1）。

ケア提供者の伝統行事参加の状況は、全員が伝統行事に参加していた。「過去」に参加していた伝統行事は、「サニツ」、「十五夜」、「部落の行事」などであった。「現在」参加している伝統行事は、宗教上の理由で参加しない1人を除き13名が、複数の伝統行事に参加し、特に「十六日」「お盆」は、12人が参加していた。

表1 ケア提供者の概要と伝統行事参加の状況

ID	性別	年代	職種	出身地	現施設での 経験年数	宮古以外 での生活歴 (年)	離郷 理由	帰郷理由	伝統行事参加の状況	
									過 去	現 在
1	女	50代	介護職	宮古島	11年	有（10年）	就職	母親の死亡	サニツ	十六日、お盆、彼岸
2	女	20代		宮古島	2年	有（3年）	進学	卒業	隣の部落の行事	十六日、お盆、正月、綱引き、池間の伝統行事、
3	男	20代		宮古島	2年	有（2年）	就職	宮古のペースが合っている		十六日、お盆
4	男	20代		宮古島	4年	無	—	—		十六日、お盆、墓参り、正月
5	女	50代		宮古島	3年	有（2年）	就職	生まれ育った所	サニツ、十五夜、節分	十六日、お盆
6	女	40代		宮古島	11年	有（1年）	進学	両親に戻された	十五夜、サニツ	—
7	男	30代		宮古島	2年	無	—	—		十六日、お盆、シーサーガウガウ、十五夜
8	男	40代		宮古島	8年	有（18年）	就職	父親の入院	部落の行事	サニツ、五穀豊穡の獅子舞、ナリヤマアヤグ、部落の行事
9	男	30代		宮古島	4年	有（6年）	進学	転勤	シーサーガウガウ、十五夜	十六日、お盆、正月、火の神
10	女	30代		宮古島	0.5年	有（10年）	進学	祖母の面倒をみる	サニツ	十六日、お盆、彼岸、十五夜、火の神
11	女	50代	看護師	宮古島	10年	有（19年）	就職	子育てと夫が長男		十六日、お盆、綱引き、十五夜
12	女	40代		宮古島	7年	有（3年）	進学	卒業		十六日、お盆、海神祭
13	女	20代	栄養士	宮古島	4年	有（6年）	進学	就職		十六日、お盆、正月
14	女	40代	事務管理者	宮古島	8年	有（14年）	進学	義父の介護		十六日、お盆

伝統行事参加の理由は、「過去」では、「楽しかったので」、「友達と会えるから」、「小遣いがもらえるから」など＜幼少時の楽しみ＞、「高齢者介護の仕事として」、「長男としての義務」など＜役割＞であった（表2）。「現在」では、「子どもの時から参加しているので、自然の流れ」、「行事の意味はわからなかったが、子供の時から参加しているので」と＜子どもの時から参加していた＞と「昔からの伝統」、「決まりごとであり、参加は当たり前」という＜参加は当たり前＞、＜先祖供養＞、＜親戚が集まる＞、＜義務と供養＞＜子どもと参加＞であった。

## 2. ケア提供者の伝統行事への認識

ケア提供者の伝統行事への認識について、高齢者が大事にしていると思われる伝統行事と、今後高齢者ケアに必要であると思う伝統行事、及びその理由について検討した（表3）。

高齢者が大事にしていると思われる伝統行事は、9人が「十六日」、「お盆」の先祖供養の行事をあげていた。その理由として「高齢者は先祖崇拝が強いから」など＜高齢者は先祖を崇拝している＞、「高齢者がお墓に行くことで家族親族が集まる」など＜家族との交流＞、「祖母が先祖崇拝し、自分に必ず行事を継承するようにと聞いている」など＜宮古島の大事な行事＞と認識していた。

表2 伝統行事の参加理由

	センテンス	参加理由
過 去	「楽しかったので」(ID5)	<幼少時の楽しみ>
	「友達と会えるから」(ID2)	
	「小遣いがもらえるから」(ID9)	
	「子ども会の行事」(ID6)	
	「小学校のころまで、意識せずに参加」(ID1 5)	
現 在	「先輩がやっていたから一緒にやった」(ID9)	<役割>
	「高齢者介護の仕事として」(ID10)	
	「長男としての義務」(ID10)	<子どもの時からの参加>
	「子どもの時から参加しているので、自然な流れ」(ID11)	
	「行事の意味はわからなかったが、子どもの時から参加していた行事」(ID1 9)	
	「子どもの時から参加しているので、理由を考えたことはない」(ID10)	<参加は当たり前>
	「昔からの伝統」(ID11)	
	「決まりごとであり、参加は当たり前」(ID13)	
	「自分の居住地で毎年やっている」(ID3)	
	「もともとある行事である」(ID9)	
	「両親から行事の意味を聞かされていて、当たり前だと思っている」(ID10)	
	「生活の中に自然にある」(ID12)	<先祖供養>
	「習慣である」(ID14)	
	「先祖供養」(ID5 10 14)	
現 在	「宮古の先祖供養の一貫である」(ID12)	<親戚が集まる>
	「親から先祖崇拝を教えられてきたから」(ID3)	
	「親戚が集まる」(ID2 5)	
	「人が集まるのが楽しい」(ID3)	<義務と供養>
	「普段話をする機会のない人と話ができる」(ID4)	
	「青年会に入っているので役割がある」(ID3)	
	「子どもの時から参加しなければいけない大事な行事」(ID4)	
	「お盆をしなければ、向こう（あの世）にいつてから困ると信じている」(ID7)	
	「祖父、母親からお盆の行事をやらなければ、困ると家族に言われているから」(ID7)	
	「使命感」(ID8)	
	「家を守ってもらうため」(ID9)	
	「守ってもらうため」(ID10)	
	「嫁ぎ先の仕事と関係しているから」(ID12)	
	「誘われたから」(ID2)	
	「子どもと参加するため」(ID11)	<子どもと参加>
	「子どもと共に楽しめる」(ID12)	

表3 高齢者が大事にしていると思われる伝統行事と今後高齢者ケアに必要であると思われる伝統行事の理由

	センテンス	理 由
高齢者が大事にしていると思われる伝統行事 (十六日、お盆)	「高齢者は行事を気にしている」(ID1)	<高齢者は先祖を崇拝をしている>
	「祖父母が先祖供養をしており、高齢者は先祖供養を大事にしていると思う」(ID 2 12)	
	「高齢者も先祖供養の日は自宅に帰る方もいるから、高齢者は先祖供養を大事にしていると思う」(ID12)	
	「高齢者は先祖崇拝が強い」(ID8)	
	「高齢者は先祖崇拝している」(ID14)	
	「高齢者には、神と触れ合う特別な日だから」(ID9)	<家族との交流>
	「高齢者がお墓に行くことで家族親族が集まる」(ID9)	
	「家族が集まる」(ID10)	
	「高齢者は長年連れ添った、家族への思いがある」(ID5)	<宮古島の大事な行事>
	「祖母が先祖崇拝し、自分に必ず行事を継承するようにと聞いている」(ID13)	
	「高齢者には大事なことであり、自分も大事だと思う」(ID5)	
今後高齢者ケアに必要であると思われる伝統行事 (十六日、お盆、お墓参り・拝み、サニツ)	「宮古島の大事な行事」(ID10)	
	「高齢者を多く一時帰宅できるようにしたい」(ID14)	<一時帰宅の機会>
	「高齢者を多く一時帰宅や墓参りできるようにしたい」(ID4)	
	「宮古は先祖崇拝が強い。墓参りだけでなく、仏壇のある家に帰宅させたい。」(ID9)	
	「高齢者が帰宅したい時に、帰宅できるようにしたい」(ID12)	
	「要介護度が高くても、ケア提供者が介護して帰宅させたい。」(ID4)	<楽しかったことの支援>
	「要介護度が高くても、ケア提供者が介護して帰宅させたい。」(ID4)	
	「高齢者が昔楽しいと思った事を支援したい。」(ID6)	<必要だがわからない>
	「必要だと思うが、どのようにしてよいかわからない」(ID2)	
	「何が必要かわからない」(ID3)	

今後高齢者ケアに必要であると思う伝統行事は、7人が「十六日」、「お盆」、「お墓参り・拝み」「サニツ（浜うり）」をあげていた。その理由として、「高齢者の多くを一時帰宅できるようにしたい」など<一時帰宅への機会>、「高齢者が昔楽しいと思った事を支援したい」など<楽しかったことの支援>、「必要だと思うが、どのようにしてよいかわからない」など<必要だがわからない>と認識していた。

### 3. ケア提供者の伝統行事に関する高齢者ケアの実践

ケア提供者の伝統行事に関する高齢者ケアの実践は、36場面であった。この場面から、高齢者の伝統行事に関するニーズの内容、高齢者の伝統行事に関するニーズの充足状況、高齢者ケアの自己評価を抽出し検討した。

#### 1) 高齢者の伝統行事に関するニーズの内容（表4）

高齢者の伝統行事に関するニーズの内容は、高齢者がケア提供者に言葉でケアを依頼した「言語によるニーズ」と、高齢者は言葉で表出していないが、高齢者の動作やこれまでの経験からケア提供者が捉えた「非言語によるニーズ」であった。

言語によるニーズは「拝みをしたので、窓を開けてほしい」などの<拝みへの直接支援の依頼>、「お盆前にお墓参りのお重を作ってほしい」など<拝みのための間接支援の依頼>、「十六日なので夫のお墓参りに行きたい」など<伝統行事への参加支援の依頼>があった。ケア提供者が捉えた非言語によるニーズは、「食事中に

神様に拝むような動作をしている」など<拝みの動作>、「伝統行事が近づくと落ち着かないことがある」など<落ち着かない様子>、「日頃のケアの中で、伝統行事の日に帰りたいと希望していたことがある」など<過去の経験>があった。

#### 2) 高齢者の伝統行事に関するニーズの充足状況（表5）

高齢者の伝統行事に関するニーズの充足状況は、高齢者の伝統行事に関するニーズをケア提供者が充足したと思われる<ニーズの充足>、訴えているニーズには添えなかったが代替ケアを提供した<代替ケア>、過去に伝統行事に関する訴えられたニーズをケア提供者が記憶し、ケアの継続や工夫をしている<ケアの発展>であった。

##### (1) ニーズの充足の例

朝のケアの途中で、高齢者に呼び止められ、「拝みをしたので、窓を開けてほしい」と頼まれた。依頼されたとおりの窓をあけると（「言われたとおりに実施した」）、窓の方向に手をあわせて拝んでいた。

##### (2) 代替ケアの例

認知症の高齢者で、十六日が近づくと、行事食をつくるために家に帰りたいと訴え落ち着かなくなった。そばに近づき話を聴くが、落ち着かず、徘徊していた。自宅に帰すことはできなかったが安全に配慮し、本人の行動を妨げないように、落ち着くまで見守った（「言われたとおりににはできないが、落ち着けるよう努力した」）。

表4 高齢者の伝統行事に関するニーズの内容

	センテンス	ニーズの内容
言語によるニーズ	「拝みをしたいので、窓を開けてほしい」(ID1 2) 「拝みしたいので、ドアを開けて欲しい」(ID1) 「神様に「土産を持ってきたから」と伝えながら捨ててほしい」(ID4) 「拝むので車椅子を介助して、外にだしてほしい」(ID3) 「拝むために車椅子で外に出て、さらに供え物のタバコに火をつけてほしい」(ID4) 「供え物を供えてほしい」(ID10)	<拝みへの直接支援の依頼>
	「お盆前に、墓参りのお重をつくってほしい」(ID13) 「旧暦の拝みを大事にしており、「今日は旧暦の何日か」教えてほしい」(ID1) 「拝みしたいので、拝む場所と供え物を準備してほしい」(ID6) 「拝む場所（施設敷地内）と供え物を準備してほしい」(ID1) 「伝統行事の時期が近づいたので、拝むために、供え物の準備してほしい」(ID8) 「お線香を買ってきてほしい」(ID11) 「神様に食べ物をとって拝んだので、ゴミ箱に捨ててほしい」(ID1 2)	<拝みへの間接支援の依頼>
	「十六日なので夫の墓参りに行きたい」(ID9) 「十六日なので家に帰りたい」(ID10) 「ウタキ（拝所）に行きたい」(ID1) 「正月に自宅に帰れなかったので、初詣に行きたい」(ID4) 「伝統行事の日の家族面会時、帰りたい」(ID6) 「伝統行事が近づいているので、行事食を作り家に帰りたい」(ID7)	<伝統行事への参加支援の依頼>
	「食事中に神様に拝むような動作している」(ID2) 「朝、「トートー」と小声で言いながらお茶を頭のあたりにかざしている」(ID9) 「行事がある時、朝食後拝んでいる」(ID4) 「日常的に食事の前に手を合わせて何かを祈っている」(ID5) 「食事の配膳時、片手、または両手を挙げ拝んでいる」(ID7 10) 「お盆の行事食のちらし寿司をみて拝んでいる」(ID4) 「神様に供え物として、食物をティッシュにくるんで居室にもっていく」(ID7) 「亡くなった夫のために、ベランダで拝んだり、お供えの代わりにタバコに火をつけて供えたりしている」(ID12) 「家族が亡くなったときに、居室のベッドで、お墓の方向を向いて拝んでる」(ID4) 「食事の配膳時、少量ずつティッシュにとって拝んでから食事をしている」(ID12)	<拝みの動作>
非言語によるニーズ	「伝統行事が近づくと、落ち着かないことがある」(ID10) 「正月の面会の出入りが多いとき、面会がないので落ちつかないことがある」(ID14) 「日頃のケアの中で、伝統行事の日に帰りたいと希望したことがある」(ID8)	<落ち着かない様子>
	「送り日に外で拝みをする利用者がいる」(ID13)	<過去の経験>

表5 高齢者の伝統行事に関するニーズの充足状況

	センテンス	ニーズの充足状況
	「言われたとおり実施した」(ID1 2 3 4) 「拝み終わるまで見守る」(ID2 4 9 10) 「言われたとおり準備した」(ID1 6 8) 「拝みの妨げにならないように見守る」(ID5 7) 「否定をしない」(ID12) 「聞かれたことを確認して伝えた。」(ID1) 「好きなように行動してもらい、本人に気付かれないよう片付ける」(ID7) 「特別なことをすることなく本人が好きなように、落ち着くまでさせている」(ID10)	<ニーズの充足>
	「言われたとおりにはできないが、落ち着けるよう努力した」(ID1 7 9 10) 「言われたとおりにはできないが、希望に近づけるよう努力した」(ID10 11) 「言われたとおりにできるよう調整したがうまくいかなかったため、希望に近づけるよう努力した」(ID6)	<代替ケア>
	「言われたとおり準備し、その後も意図的に継続している」(ID13) 「言われたとおり実施した。また他の希望者と一緒に実施した」(ID4) 「積極的に声をかけをし、外で散歩をした」(ID14) 「伝統行事に利用者が帰宅できるよう、家族に連絡をとるようにしている」(ID8) 「家での送り日に近づけるようお重でお供えの準備をした。お重でお供えをして、拝みをした」(ID13) 「拝みのあと、旧盆であることを伝えると、神様への感謝や、自分の昔の伝統行事の話を始めた」(ID4) 「拝み終わるまで見守る。その後意図的に行事のことを話題にした」(ID4)	<ケアの発展>

### (3) ケアの発展の例

過去にお盆の送り日に、高齢者からお重をつくってほしいと頼まれた経験があった。お盆の送り日にはそれぞれの家庭でお重を作り供える習慣があることを知っていたため、依頼のあった翌年から毎年、家庭と同じようなお重をお盆の送り日には準備するようにしている。施設のテーブルにお重を並べると、高齢者たちは手をあわせて拝み、みんなで夕食としてお重を食べる（「言われたとおり準備し、その後も意図的に継続している」）。

### 3) 高齢者ケアの自己評価（表6）

伝統行事に関する高齢者ケアの自己評価は、「高齢者が大事にしていることを支援する」など＜高齢者のニーズ重視のケア＞、「行事用に食事を工夫することは、施設で伝えにくい伝統行事を表現できると考えられる」など＜必要なケア＞、「習慣を継続させるのは当たり前」など、＜習慣の継続のケア＞、「日常的に支援しているので、ケアとして意識していない」など＜当り前のケア＞という自己評価であった。

## IV. 考察

### 1. 伝統行事と施設入所高齢者のQOL

ケア提供者は、全員が宮古島出身であり、伝統行事に「過去」も「現在」も参加し、その参加理由として＜子どもの時からの参加＞、＜参加は当たり前＞、＜先祖供養＞、＜親戚が集まる＞、＜義務と供養＞があった。宮古島高齢者の伝統行事の参加理由は、先行研究で、先祖供養の＜祈願＞、人との＜交流がある＞、部落の行事としての＜義務＞<sup>4)</sup>と報告されている。このように、ケア提供者は高齢者と類似した理由で伝統行事に参加していたことから、高齢者の生活してきた地域の伝統行事を把握しやすいと考えられた。

また、ケア提供者の伝統行事への認識は、＜高齢者は先祖を崇拝している＞、＜家族との交流＞になり＜宮古島の大事な行事＞と捉え、伝統行事は＜一時帰宅の機会＞となり＜楽しかったことの支援＞をしようとしていた。施設入所高齢者のQOLの影響要因は「家族・友人」<sup>7, 8)</sup>であることから、家族や親族が集まり楽しい場面となる伝統行事の機会を捉えて、QOL向上のための高齢者ケアにつなげたいと認識していると考えられた。

表6 高齢者ケアの自己評価

センテンス	ケアの自己評価
「高齢者が大事にしていることを、支援する」(ID4) 「高齢者の暦を大事にする」(ID1) 「高齢者がやりたいことを支援するのは当たり前。納得して落ち着いてくればよい」(ID1) 「高齢者の好きなようにすごさせたい」(ID3) 「幼少のころから神様に拝むことをみているので、その支援をおこなうことは当たり前」(ID4 9) 「高齢者がやりたいことを支援するのは当たり前と考えている」(ID1) 「高齢者の希望なので、その支援」(ID10) 「高齢者がしたいことをすることが必要と考える」(ID8) 「高齢者の神様への感謝の気持ちに対して尊敬している」(ID5)	＜高齢者のニーズ重視のケア＞
「認知症であることを活かし話題を変えて落ち着かせている」(ID9 10) 「火の神の習慣を知っている年配である私の役割と認識している」(ID6) 「行事用に食事を工夫することは、施設では伝えにくい伝統行事を表現できると考えられる」(ID13) 「入所前にしていたことを支援したかった」(ID4) 「ADLが低下した利用者が帰りたいと希望しているときは、家族と調整を努力している」(ID6) 「薬や身体拘束で対処せず可能な限り付き合うしかない」(ID7) 「高齢者を落ち着かせるために話を共有することは必要な支援」(ID11) 「さびしがる高齢者の気持ちを受け入れるようにした」(ID14) 「高齢者の住んでいた地域に帰ると家族や知人に会え、生きる力になるのでケアにつながると思う」(ID8) 「行事用に食事を工夫することは、施設では伝えにくい伝統行事を表現できると考えられる」(ID13)	＜必要なケア＞
「習慣を継続させるのは当たり前」(ID2 10) 「習慣を大事にしたい」(ID7) 「習慣になっていること。言われたようにしている」(ID1 2 10) 「高齢者の習慣なので継続できるようにする」(ID2) 「幼少のころ同様の習慣で育った経験があり、この習慣の継続は当たり前」(ID4) 「その場面を日頃の習慣の継続だと理解している」(ID12)	＜習慣の継続のケア＞
「日常的である。ケア提供者間で、その行為が話題になることはない」(ID1) 「日常的に支援しているので、ケアとして意識はしていない」(ID1) 「昔の伝統行事の話をじっくりきくことは当たり前」(ID4)	＜当り前のケア＞

## 2. 施設入所高齢者への伝統行事の現実的なケアのあり方

ケア提供者の伝統行事に関するケアの実際は、ケア提供者が高齢者の伝統行事に関するニーズを言語による依頼や、非言語の動作や経験を捉えて把握し、そのニーズの充足状況は＜ニーズの充足＞、＜代替ケア＞だけでなく＜ケアの発展＞をさせていた。そして、高齢者ケアの自己評価として、伝統行事は＜高齢者のニーズ重視のケア＞で＜習慣の継続のケア＞であり＜必要なケア＞、＜当たり前のケア＞としていた。

このように、ケア提供者が施設入所高齢者と伝統行事を共有していることが、ケア提供者の伝統行事への認識に影響し、必要で当たり前のケアとして実施されていたと考えられる。

ケア提供者として、施設入所高齢者の伝統行事に関するニーズに対応するためには、地域の生活者の一人として、伝統行事について学び、参加するといった、(地域の)内部の人々の捉え方を理解するイーミックな見方<sup>9)</sup>が、施設ケアに伝統行事を取り入れる第一歩であると推察された。

## V. 結論

1. ケア提供者は全員が、「十六日」や「お盆」等の伝統行事に参加していた。
2. ケア提供者の伝統行事への認識は、＜高齢者は先祖を崇拝している＞、＜家族との交流＞になり＜宮古島の大事な行事＞とし、伝統行事は＜一時帰宅の機会＞となり＜楽しかったことの支援＞であり高齢者ケアに必要と認識していた。
3. ケア提供者の伝統行事に関する高齢者ケアの実際は、高齢者の伝統行事に関するニーズには、言語によるニーズ、非言語によるニーズがあり、そのニーズの充足状況は、＜ニーズの充足＞、＜代替ケア＞だけでなく＜ケアの発展＞がみられた。そして、高齢者ケアの自己評価では、＜高齢者のニーズ重視のケア＞、＜必要なケア＞、＜習慣の継続＞、＜当たり前のケア＞と評価していた。

## 謝辞

本研究にご協力くださいましたケア提供者の皆様、多くの関係者に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省高齢者介護研究会 (2003) : 2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～, <http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/index.html> (2009年10月1日現)。
- 2) 白澤政和 (2005) : ストレngthsに着目したケアプランの手引き星座理論を使って, 13, 中央法規, 東京。
- 3) 與古田孝夫, 赤嶺依子, 具志堅美智子 (2002) : 沖縄における地域高齢者の self-esteem (自尊感情) とその関連要因についての検討, 医学と生物, 44(5), 147-151。
- 4) 大湾明美, 下地敏洋, 野口美和子, 佐久川政吉, 呉地祥友里, 田場由紀 (2007) : 高齢者が伝統行事に参加することによる幸福観への影響—宮古島高齢者の幸福感の「推測」と「語り」の回答内容の分析から—, 日本老年看護学会第12回学術集会抄録集, 194。
- 5) 大湾明美, 佐久川政吉, 大川嶺子, 下地幸子, 富本傳, 根本憲永 (2003) : 離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究—「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題—, 沖縄県立看護大学紀要, 4, 37-47。
- 6) 呉地祥友里, 大湾明美, 佐久川政吉, 大川嶺子, 小川なお子 (2003) : 離島 T 町における施設入所高齢者の「生きがい作り事業」の評価—「3 年間のふる里訪問」希望調査から—, 第34回日本看護学会論文集老年看護, 156-158。
- 7) 流石ゆり子, 伊藤康児 (2007) : 終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の QOL とその関連要因, 老年看護学, 12(1), 87-93。
- 8) 山下昭美, 近藤享子, 田中隆, 門奈丈之, 掛場和子, 木下迪男 (2001) : 施設高齢者の生きがい感と QOL との関連について, 厚生の指標, 48(4), 12-19。
- 9) Harris, M. (1976): History and significance of the emic/etic distinction. Annual Review of Anthropology, 5, 329-350。